資　料

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
[XXXII]

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

第 1 次世界大戦

青年たちは具合悪く始まった陽気な新しい戦争[1]に，意気揚々として出発した。ドイツ軍はパリに向かって前進して来た。しかしジョッフル[2]とパリ軍事総督ガリエニ[3]が防備を固め，マルヌ川の防衛線[4]を強化するため，パリのすべてのタクシーを動員した。次に来たのは，泥と寒気の中の果てし無い塹壕戦と，聖金曜日，肥っちょベルタ[5]によるサン - ジェルヴ教会[6]への砲撃だった。

クレマンソーは当時の戦争指導者だった。禿あがった額の老兵の円い頭，丸い眼瞼，長くのびた眉毛の下の力強い視線，少し垂れ気味の口髭，虎（クレマンソーの仇名）は好戦的な共和派だった。自分をなだめようとする人々に対し，「わしは戦争をするんだ」と彼は言った。彼の第 1 次内閣は，1909 年に瓦解する。かくてブリアン[7]に交替しなければならなかった。次に彼は共和国大統領選出においてポワンカレ[8]と戦わねばならなかった。しかし 1917 年 11 月 16 日，「自由人」*l'Homme libre* に続く新聞「鎖につながれた人間」*l'Homme enchainé* を発行した頃，第 2 次内閣の首相に任命されたのである。この新しい新聞で彼は「組立式山小屋」と呼んでいたリボー[9]内閣の絶えざる改造を告発している。それから以後「勝利の父」は軍と国家の精神を支える。「前線の権利と銃後の義

* 福岡大学名誉教授

務」を，彼は塹壕の兵士たちを視察に行った時，彼らに言ったのである。ヴェルダンの勝利[10] の後に示したペタン[11] の消極的な態度を前にして，彼は連合軍からやっと入手した総司令官のポストをフェルディナン・フォッシュ[12] に与えた。

前線で，ペギーは出撃直後に戦死する[13]。その間，マルセル・プルーストは，国内にいて，「日暮れの夕べ，羽虫か小鳥ととりちがいそうだが，実は上空からパリを哨戒している飛行機の小さな茶色の点」がパリを横切って行くのを目撃している。彼は夕食時の満員のレストランを描いているが，「店内には 6 日だけ死の絶えざる危険から逃れて来たが，すぐに塹壕に戻らねばならない休暇をもらった兵士たちが時々迷い込んでいた。また町中の明りが消される頃の夜の大通りの神秘的な闇の並木の下通行人は滅多に無く，やっと見分けられる」有様を報じている。

1918 年 11 月 11 日，勝利である[14]。パリは歓喜に包まれる。ノートル - ダム寺院では感謝の歌 *Te Deum* が歌われる。クレマンソーは徹頭徹尾俗人でいたかったので，共和国大統領はそれに出席しないようにした。しかしながら彼はポワンカレの後任の大統領選挙には失敗する。人々は彼より哀れな病人のデシャネルを選んだのだが，この選挙には和平主義者ブリアンが一枚噛んでいた。ブリアンはマルヴィー[15] やカイヨー[16] と同じく敗北主義者として虎クレマンソーから攻撃されるのを恐れたからである。

130 万の死者と更に 300 万の負傷者を出して悲しみに沈んだフランスで，ヴァチカンとの外交関係は長い不和の後に再開される。追放されていた修道会が帰国する。

カトリシスムは，ラコルデールやフレデリック・オザナム[17] が与えていた社会的役割を再び取り戻す。マルク・サンニエ[18] は「畝」*le Sillon* を創刊，これが後に「アクシオン・カトリック」*l'Action catholique* になる。トマス・アクィナスの神学に神秘と理性のバランスを発見した哲学者ジャック・マリタン[19] は神学的知識のレベルを向上させる。

危機のヨーロッパの首都パリ

鉄筋コンクリートと「ヴォワザン」プラン

パリの都市計画は，オスマンの仕事以来ほとんど修正されなかった。しかしながらその

時から鉄筋コンクリートの出現により構造内部に一種の激変が生じていた。ペレ兄弟[20]がこの新素材の家をパリのフランクリン街[21]に建設して，この新素材のパイオニアになる。その家の内部の骨組みは外壁の支えを大きく減少させたので，壁と窓を合致させる必要がもはや無くなったのである。方法は簡潔になる。「骨組みを建て，その隙間をお好みのもので塞ぎたまえ。素材からこそ形が生れる。」こうして我々はペレ兄弟，特に弟より長生きしたオーギュストにシャン‐ゼリゼ劇場[22]建設の恩恵を受けているのだが，この劇場は非難の叫び声を誘発してしまう。

1925 年，パリは装飾美術万国博覧会で数か月の祭典を開催した。セーヌ左岸も同様だったが，コンコルド広場からクール‐ラ‐レーヌまで，多かれ少なかれ立体主義の形態の中にラリック[23]式の「メトロ」スタイルや装飾の復活を目にすることになる。その装飾を自動車製造のアンドレ・シトロエン[24]が ―― 花々しい広告なのだが ―― エッフェル塔のイリュミネーションに螺旋状のモチーフとして使用した。到る所にデザイナーのポワレの影響がみられた。それはアンヴァリッドの前に係留した川船（それらは「愛」「歓喜」「オルガン」と命名されていた）の上にラウール・デュフィ作の壁掛けが展示され，それらの中には草書体の表意文字でデザインされたパリの記念建造物と共に，大きな蜂の巣を想起させる図案もみられた。

博覧会で，コンクリートは貴族の授爵状を取得しなくても，少なくとも団体としての認証は受けた。コンクリートはル・コルビジエ[25]が一本の木の周囲に建造した新精神のパヴィリヨンの中にその本部を持っていた。（そのマロニエの木はコンクリートの白い塊で所々貫通しているように見えた。）建築家はそこのホールの一部屋の白い壁にパリの拡大プラン，「ヴォワザン[26]」プランを掲示した。そこで問題にされているのは，パリにおいて「そのミューゼ」（ノートル‐ダム，ル・ルーヴル，ヴァンドーム広場，オペラ座広場，シャン‐ゼリゼ）を保存し，人口過剰になったこの都市の周辺部に，その基盤の周囲に広大な緑地帯をもつ摩天楼の冠状地帯を建設する事である。

コルビュと呼ばれた人物はこの事を理解していた。即ち人家の密集や人口過剰，交通渋滞などでパリが息苦しい場所になるのを防ぐため，その周囲全体に，現在及び未来の生活に必要な事に対応でき，光と眺望と充分に呼吸できる空気を持つ近代都市を建設しなければならなかった。前代未聞の事だった！

1925 年の博覧会において，様式の敵である様式化が支配していた。それにもかかわらず，パリは順風満帆であった。ヨーロッパにおける芸術の都になり，その公認はロシア・

バレー団の再演によってさらに強調され，秋には，フルーリュス街[27]のアメリカ人シュタイン[28]や画家のマティス，ピカソ，ヴラマンクらによりパリに紹介された黒のモードから生れた黒人レヴューの旗上げ公演が，シャン＝ゼリゼ劇場で行われた。黒人ダンサーのジョゼフィーヌ・ベーカー[29]と共にこのモードは，ジャズ音楽と黒人霊歌から生れた民俗音楽や神秘やエクゾティスムを渇望していた一般大衆に普及していく。

映画では，ルネ・クレール[30]が「幕間」*Entr'acte* で未来の可能性という花束を作った後で，トーキー映画の第一作「パリの屋根の下」*Sous les toits de Paris* により，この首都の鳥瞰図と街角の音楽家や屋根裏の恋人たちの肖像を提示した。

左翼連合から 1934 年 2 月 6 日へ

当時はブリアンの時代だった。彼は「ヨーロッパをつくり」アメリカ合衆国との関係を改善しようと願って，フランス精神の使節としてアンリ・ベルグソンを派遣した。ブリアンは，西欧精神の衰弱を実感していたので，ヴァレリー[31]の言う如く，もしヨーロッパが「アメリカ合衆国とロシアの巨躯の間の脳髄，世界の貴重な部分」でなくなれば，「アジア大陸の小さな岬」に過ぎなくなる危機として，ヨーロッパが包囲される事を予見している。

しかしブリアンは自分と共に不可避の指導権を握るべきはフランスなのだという事を理解しない右翼を敵と見做していた。この同盟を前にして（それ以来常に外務大臣を務めていた）ブリアンは，ポアンカレの前から姿を消さねばならなかった。ポアンカレは今度は自分の番として，フランスがヴェルサイユ条約の結果曳きずっていた後遺症たるドイツとの戦時賠償金政策の再開を失敗してしまう。

かくして，左翼連合[32]，「教授たちの共和国」が出現する。政府は知識階級の過激派や社会主義者が参加した過激社会主義者を結合させる。

左翼の人間すべては信念を持って「小農，小売商，小地主，つつましく暮す小市民」について語る。フランスにはもはや「高額な」年金生活者や大地主はいないかのようだった！連合のこの運動に反抗してレオン・ドーデ[33]とシャルル・モーラスの新聞「アクシオン・フランセーズ」が立ち上る。これは重要な作家たちを加盟させている王党派の機関紙であった。テタンジェは愛国者同盟を創設したが，これはインフレを昂進させた。パンルベ[34]もブリアンもエリオ[35]もフランの下落を防止できず，社会主義者と過激派は分裂してし

まう。貨幣はさらに下落し続ける。そこで再びポアンカレが登場する。彼は左派の辞職に対処し，フランを 1914 年の価値の 4 分の 1 に安定させた。エリオが「金の防壁」と呼んだこの事態を前にして，繁栄が復活する。1928 年以降，選挙は左派の多数派に右派の多数派がとって代る。

しかしながらドーメルグ[36] の後を受けたドーメル大統領が[37] が，ベリエール街[38] のロートシルド財団の建物で狂人によって暗殺されてから，局面は悪い方向に暗転する。それはスキャンダルの連続で，なかでもスタヴィスキー[39] の破産は公益質店に絡む詐欺事件であり，またウストリック[40] の共犯などもあった。それは全世界における金融危機だった。しかしながら戦争は（ブリアン‐ケロッグ[41] の）「パリ協定」により法の保護の外に置かれた。

長い間企まれその時を待っていた一つの陰謀が明らかになる。ド・ラ・ロック大佐[42] と彼の「火の十字架団」[43] と老兵たち，テタンジェと彼の「青年愛国者たち」が，1934 年 2 月 6 日を期して右翼勢力の叛乱を準備していたのである。その日，すべての反動勢力が決起し，また他方で共産主義者たちが下院に殺到したため，議員たちは逃亡してしまう。コンコルド広場には機動隊の騎兵が自分たちの馬の後脚の飛節を切ったデモ隊に発砲する。群衆は激昂する。バスが燃やされる。死者が出る。ダラディエ[44] の辞職が事態を少し鎮静させた。

人々はトゥールヌフーユに前大統領ドーメルグ，綽名で「ガストネ」Gastounet と呼ばれた人物を探しに行く。彼の存在は民衆を安心させたからである。しかしショータン[45] 内閣は，ユーゴスラヴィア国王と大臣バルトーの二重の暗殺がマルセーユで突発した中で崩壊する。共和派は金の防壁が再来するのを見て不満が昂じて，ダラディエ‐レオン・ブルム‐モーリス・トレーズの同盟を用意して復讐を準備する。

2 月 6 日と同年の 1934 年，フレデリック・ジョリオ[46] と彼の妻で，ピエールとマリ・キュリー夫妻の娘イレーヌ[47] は，原子構造の研究を幸運にも続行しており，「中性子」の存在を証明し，人工放射能を発見した。これは原子物理学にとり大発見で，それ以後，人工放射線元素は一般に使用されるようになるからである。ジョリオ夫妻は二人とも社会のための完全な改革に情熱を燃やし，物理学者ランジュヴァン[48] とペラン[49] らと一緒に，労働者階級の防衛者になる。

他方，ルイ・ド・ブロイ公[50] は，「量子」quanta 理論の研究を続け，未来の原子物理学の土台となる波動力学を発見する。

ヴァラエティー

パリ市民はランドリュ裁判[51]に熱中する。彼らはガンベの青髭を見て笑ってしまう。それは痩せこけた人物で，頭は禿げ，髭は長く延ばし，きらきら光る目に物を言わせ，接続法の半過去を使い，自宅に10人の女性を呼んだ事はない，と自分を弁護した。（彼女たちは彼の求婚に応じ）来宅し，殺され，バラバラにされ，料理用の石炭ストーブで焼かれてしまったのである。

人々はタンゴを踊った。人々は耳の線で髪を切り揃えた若い女性たちを描いた『ラ・ガルソンヌ』*La Garçonne*[52]という小説を愛読する。人々は女性のような服装をしたモーリス・ロスタン[53]をひやかす。人々はミスタンゲット[54]の脚線美とカジノ・ド・パリでジャヴァ・ダンスを踊るモーリス・シュヴァリエのカンカン帽を賛美する。

演劇界では，ジャック・コポー[56]がヴィユー・コロンビエ座の狭いホールの立役者で，その舞台でシェイクスピアやシャルル・ヴィルドラック[57]の楽しい戯曲を完璧に演じた。彼の弟子であるデュラン[58]とコポーは自分たちの劇場のアトリエ座[59]とアテネ座[60]で演じる。映画では，「スター」の支配が始まり，ルノワール[61]は「大いなる幻影」*le Grande Illusion*で，人間性を喪失させまた取り戻させる戦争を描いている。

優雅なボクサーのジョルジュ・カルパンティエ[62]が，アメリカ人のデンプシー[63]に「ノック・アウト」されて以来，パリはその試合で野性が知性に勝利したのを見たのだが，スポーツは女性たちが関与した多くの勝利を知ったのである。

「ハロー，パリ？」1927年5月21日，アメリカ人の青年チャールズ・リンドバーグ[64]は，33時間の飛行のあと，無着陸大西洋横断初飛行に成功して，ル・ブールジェ飛行場に着陸した。3年後，ジャン・メルモス[65]は南大西洋往復横断を試みるが，乗機「南十字星」号と共に消息を絶ってしまう。

文学においては，アンドレ・ブルトン[66]の『磁場』*Les Champs magnétiques*とフィリップ・スーポー[67]と共に，ダダイズム[68]の運動とシュルレアリスム[69]が誕生する。アラゴン[70]は『パリの農夫』*le Paysan de Paris*を出版，セリーヌ[71]は『夜の果の旅』*le Voyage au bout de la nuit*を出版する。コレット[72]は比類ない動物寓話集に瀟洒な静物をちりばめた偉大な作品を書く。ジッド[73]が流行兒となる。コクトーは成功する。メニルモンタンの息子シャルル・トレネ[74]は，ミュージック・ホールのため生々したメロディーをもつ自作のシャンソンを作曲する。そのホールでは，ダミア[75]の跡を継いだ少女のピ

アフ[76]が，舞台の上でそりかえり，両足を開き，パリの貧しい女として，熱く反響する声で goualante（シャンソンの卑語）を絶叫したのである。

人民戦線[77]（1936）

スペイン内乱の間，左派は人民戦線を宣言し，ロマン・ロラン[78]とアンリ・バルビュス[79]がその理念を発表する。「パン，自由，平和」これが政策の主眼だった。バスチーユ広場からナシオン広場まで 10 万人以上の長いデモが拳をふりあげて行進したのもその時だった。レオン・ブルムが，ヒトラーの軍隊がライン河の非武装地帯に侵入するまま傍観していたアルベール・サロー[80]に代り内閣首班に就任する。

洗練されて背が高く，広い縁の帽子の下の秀いでた額，人を魅惑するレオン・ブルムは稀有な洞察力で未来を思考していた。1936 年 6 月 7 日，彼は生産総同盟と労働総同盟の代表団をマティニョン内閣官庁[81]に召集した。経営者側はすべての点で譲歩する。労働団体契約の確定，組合の権利の保証，給与の増額，すべての労働者への有給休暇，ストライキに対する処罰の禁止である。

しかしブルム内閣は極左勢力の侵蝕に対し自己防衛をしなければならかった。不満を持った経営者側と共産主義者の労働者側からの二方面から攻撃された。労働者側は赤旗を掲げて工場を占拠し，万博の前日に建物を奪取するストを断行した。このためブルムと社会主義者たちはストに対して戦わなければならなかった。1937 年 6 月 20 日，上院により不信任されレオン・ブルムは辞職，共和派はムッソリーニのファシスムと共産主義の間で身動きがとれなくなってしまった。

レオン・ブルムは，現在が絶えずより暗くなりつつあった時，未来のため，遠い未来のために働いたのである。ヒトラーのドイツはチェコスロヴァキアに侵入，スエーデン地帯を植民地化し，つづいてボヘミアとモラヴィアを占領した。1939 年，ヒトラーは自分の前でイギリスのチェンヴァレン[82]，フランスのダラディエが気弱になったのを見たミュンヘン会談[83]の 1 年後，総統は第 2 次世界大戦に挑戦したのである。

（続　く）

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
（訳　注　XXXII）

1）第1次世界大戦と命名されるこの戦争は，オーストリーがセルヴィアに宣戦布告して開始された（1914.7.28），オーストリーの同盟国であるドイツはその援助のために総動員令を発布，セルヴィアと同盟関係にあったロシアと対立，ドイツはロシアに対し8月1日に宣戦布告した。ロシアと同盟関係にあるフランスを叩くべく，ドイツは8月3日にフランスに宣戦布告を通告，中立国ベルギーを横断してフランスを急襲する。これを知ったイギリスは8月4日ドイツに宣戦布告し，ナポレオン戦争以来の大規模な戦闘が主としてフランスで展開された。最初フランス人のみならず誰もがクリスマスまでに終結するだろうと楽観視していた。しかし戦闘は塹壕戦という予想もしない長期戦となり，精度が格段に進歩した大砲，機関銃，小銃などの殺傷力の増大，また史上初めて登場する戦車や飛行機，飛行船，毒ガスなどの新兵器により，交戦国双方共に多くの死傷者を続出する悲劇的な結果となった。人命のみならず，破壊された家屋，工場，農園など物的損失も甚大で，荒廃した国土や廃業を復旧するのにこれまで経験した事のない苦労と努力が必要とされた。

2）Joseph Jacques Césare Joffre（1852－1931）：エコル・ポリテクニック出身の軍人。工兵士官としてトンキン，スーダン，マダガスカルなどに勤務，1902年に旅団長，1911年に参謀総長兼最高軍事顧問会副会長になった。兵役3年制を支持，砲兵部隊の強化を主張，第1次世界大戦では，北部及び北東方面軍を指揮したが，ドイツ軍右翼の攻撃を軽視したため，8月14日から24日までの国境周辺の戦闘に破れ，退却せざるを得なかった。しかしマルヌ川の防衛ラインで敗軍を再編し，ガリエニの援軍を得て固守し，ドイツ軍の進撃を阻止した（9.5.－12.）。彼の反撃作戦はドイツ軍が先攻したヴェルダンの会戦（1916.2.21.－12.18）やソンムの会戦（1916.7.1－11.28.）で実現しなかった。これ以後彼は指揮をロベール・ジョルジュ・ニヴェル将軍（1856－1924）に譲った。1916年12月26日，彼は元帥に輔された。駐米大使としてアメリカに参戦を促している（1917）。アカデミー・フランセーズ会員（1918）となり，『回想録』*Mêmoires* を残している（1932）。

3）Joseph Simon Gallieni（1849－1916）：オート－ガロンヌ県サン－ベア出身。1870年サン－シール陸軍士官学校を卒業，普仏戦争，トンキン，ニジェール，セネガル，マダ

ガスカルに勤務，同島総督としてラヴァヴァロ女王を退位させ，原住民の叛乱を鎮圧し，マダガスカルの完全植民地化に成功した（1896－1905）。第1次世界大戦時にパリ軍事総督となる（1914.8.26）。首都の防備を固めた後，ウルクの戦いでドイツ軍右翼を撃破，マルヌの会戦の勝因をつくった。陸軍大臣を務め（1915－16），死後に元帥位を遺贈された。

4）マルヌ川の会戦：2度あり，第1回は1914年9月5日から12日まで，第2回は1918年7月15日から8月7日までの戦いである。第1回の戦いはジョッフルとガリエニのフランス軍とフレンチ率いるイギリス軍に対し，クルックとバロウ将軍のドイツ軍が対戦した。フランス軍はパリのタクシーを総動員して兵力を増強，クルックの判断ミスもあり，クルックの第1軍とバロウの第2軍の間にマルヌ川に面して間隙が生じ，その間隙の中にイギリス軍とフランス軍が突入し両軍を分断孤立させ，フランス各師団がドイツ軍を大きく包囲する状況となった。ドイツ参謀長モルトケは自軍の壊滅を避けるため撤退命令を発し，ドイツ軍は攻勢から転進し，フランスの防衛は成功，はじめての勝利を手にした。第2回は1918年7月15日にドイツ軍がランスの南西でマルヌ川を再渡河し（7.15.－17.），シャトー＝チエリ方面に進撃しようとしたがフランス・イギリス連合軍に反撃され，退却した戦いを指す。

5）la grosse Bertha：Dicke Berta。ベルタ・クルップ・フォン・クルップ・ウント・アルバック夫人にパリ市民がからかってつけた綽名。彼女の経営するクルップ武器製造所が生産した口径432ミリの長距離砲が，第1次大戦中に要塞の破壊などに使用された。ベルタ（1886－1957）はドイツの工業カルテルのフリードリッヒ・クルップ（1787－1826）の孫である。この大砲の射程距離は90粁から120粁という。しかし1918年にパリを砲撃したのは射程15粁しかない別の大砲で，愛称は「のっぽのマックス」Max le Longという。

6）église Saint-Gervais-Saint-Protois：第4区の同名のサン＝ジェルヴェ広場にある。リュテシア時代はこの辺一帯は沼沢地だったが，所々に砂利で出来た小さな丘が散在，そのうちに人が住み始め，サン＝ジェルヴの丘は一番早く人が住んだという。南斜面にローマ時代にサンリスに通じる街道があり，それに沿って墓地が出来て，次に礼拝堂が建立される。ジェルヴとポルテの両聖人は双子の兄弟で，ネロの時代にミラノで殉教したと伝えられる。387年にその遺骸が奇蹟的にパリで発見され，それがこの教会の母胎といわれる。ヴァイキングにより焼き払われた教会は再建されるが，年代を経るうち手狭になり3度ほど増改築され，1657年に完成して現在に至っている。フランボワイヤン様式，ゴチック

様式，ルネサンス様式と建築当時の様式が混在しているが，堂々たる建物で，パリの教会の代表の一つである。1918 年 3 月 29 日の聖金曜日の午後に，ドイツ軍の長距離砲「肥っちょベルタ」が教会の北側の 2 番目と 3 番目のガラス窓の間の支柱に命中，周囲の天井が崩落し，参詣していた信者たちの頭上に落下，200 名の負傷者がでて，そのうち 50 名が死亡するという大惨事を惹起した。

7）Aristide Briand（1862－1932）：ナント生れ。中流家庭の出身で弁護士ついでジャーナリストになり，戦闘的社会主義者として頭角をあらわす。社会党書記長（1901）となりその死までロワール - アトランチック県の代議士に連続当選している。サリアニ内閣に文相として初入閣して以後 22 回の入閣を果す。1909 年 7 月 24 日，クレマンソーの跡を受け首相となり，鉄道員のストライキを弾圧した。この処置により社会主義者の旧友から非難されたが，カトリック教会などの保守層の好感を得た。第 1 次大戦中は連立内閣の首相兼外相として勝利のため努力（1915－17），その後引退したが（1917－21），左右両派の対立を解消するため再登場し，ポアンカレの対独強硬外交を転換し，平和的協調外交を主唱，戦後処理に当り，「平和の巡礼者」と呼ばれる。国際連盟フランス代表（1924），トイツとロカルノ協定の締結（1925），ケロッグ - ブリアン協定（1927）など多くの不戦條約を成立させ，戦後の平和外交に指導的役割を果した。ノーベル平和賞を受賞している（1926）。

8）Raymond Nicola Landry Poincaré（1860－1934）：北仏ムーズ県の県庁所在地バール - ル - デュック市の出身。有名な物理学者，数学者のアンリ・ポワンカレ（1854－1912）の弟。弁護士から政界に入り（1887－1902），文相（1893－95）兼蔵相（1894－95）となる。ドレフュス事件では彼のため熱弁を揮い，教会勢力と戦い教育の世俗化に努力した。外相兼首相として（1912.1.－23.1.），イギリスと協同してドイツに対抗，ロシアとの同盟を成立させた。ファリエールの後任として大統領に就任しロシアを訪問し協力関係を確認した（1914.7.）。第 1 次大戦に備え，兵役 3 年延長を可決させ，ロシアに対し動員令の発令を極力推進したため，反対派から「戦争屋ポワンカレ」Poincaré-le-Guerre の罵声を浴びた。開戦と共に，議会に祖国防衛のための一致団結を呼びかけ，「神聖同盟」Union sacrée を実現した。敗北主義を剋服，国防力，行政力の集中強化を計り，勝利を実現したのである。戦争の予想外の長期化のためクレマンソーに桂冠，上院に帰り外交委員長となった。戦後，対独強硬策を主張，ブリアンに代り首相兼外相となり（1922－24），ドイツからの賠償の 52%，60 年年賦を承認させ，ルール炭田地方占領を断行した。左翼

連合の勝利で下野するが，1926 年に首相に帰り咲き，フランの安定，公債消化による財政危機を打開しようとしたが，急進社会党の反対にあい実現せず，イギリスとアメリカに対する戦債償却方法を確立した後に病気のため辞職した（1929.7.27.）.

9）Alexandre Félix Joseph Ribot（1842－1923）：北仏パ‐ド‐カレー県サン‐トメール出身。弁護士，検事を経て，パ‐ド‐カレー県選出の代議士として政界入りし，穏健派の共和派のリーダーになる。外相として（1890－93），露仏同盟の成立を実現，ルーベの跡を受け首相に就任した（1892.12.－1893.3.）。しかしパナマ運河事件に経済相ルーヴィエが連座し，内閣は崩壊する。第 2 次内閣首相として外相アノトーと共に対独融和策をとり，キール軍港を訪問（1895.6.），またマダガスカルの植民地化に成功した（1895.1.－12.）。1909 年に上院議員，経済相（1914－17），次に第 1 次大戦直前の危機的時期に首相となり（1917.3.－9.），敗北したニヴェル将軍を更迭しペタン将軍を任命，ペタンはドイツ軍の進撃を阻止して軍への信頼を回復する。国内ではマタ・ハリなど有名なスパイ事件が摘発され，責任者の内相マルヴィーを辞任させねばならなかった。外交面では戦争終結のためオーストリーとの折衝，スイスでフォン・ランケン男爵との対独交渉を行った。これらが敗北主義と攻撃され辞職に追い込まれる。その後パンルヴェ内閣（1917.9.－11.）の外相を務めるが，退任後は政界の表舞台に立つ事はなかった。1906 年アカデミー・フランセーズ会員に選出されている。

10）bataille de Verdun：（1916.2.21.－1917.8）：北仏ムーズ県の中都市ヴェルダンは北東部戦線の中心拠点で，その塹壕がドイツ軍の中に突出していた。両軍の間で 18 か月間戦闘はなく戦場は平穏だった。ドイツ軍野戦参謀長エリック・フォン・ハルケンハイン（1861－1922）は，フランス軍の戦力は枯渇していると考え，更なる出血を強要する事で打撃を与えようと決心，1916 年 2 月 21 日，攻撃を開始した。ドイツ軍の優勢な火砲の集中砲火により連合軍は退却を余儀なくされ，ドーモン要塞も占領される（2.25.）。しかし第 2 軍司令官ペタン将軍のヴェルダンに対する補給路確保の命令により，人員や物資を補充されたヴェルダンのフランス軍はドイツ軍の猛攻に耐えた。この間マンジャン将軍（1866－1925）指揮のフランス第 5 歩兵師団の反攻もドーモン奪回に成功しなかった（5.22.－24.）。クロンプリンツ指揮のドイツ第 5 軍団が 6 月 21 日に進撃を再開，フルーリなどを占領したが，彼らの侵攻はそこまでだった。反撃態勢を整えた連合軍が，ドイツ軍の最後の攻撃を阻止（7.11.－12.），反撃に転じたのである。連合軍が占領地を完全に奪回するのは翌 1917 年 8 月であった。「ダンケルクの地獄」といわれたこの激戦で，フラ

ンス軍は 36 万，ドイツ軍は 33 万 5 千の兵を失った。

11）Henri Philippe Pétain（1856－1951）：北仏パ‐ド‐カレー県コシ‐ア‐ラ‐トゥール出身の軍人。農家の出身で，陸軍士官学校を卒業し（1876），陸軍大学に入学，卒業後はその教官となる。1914 年の退役直前まではアラス歩兵連隊司令官の大佐にすぎなかった。彼は日露戦争の教訓から，最高司令部の積極的攻撃より，防禦に力点を置いた陣地戦を主張した。1914 年 8 月，敗戦続きのなか，第 1 軍歩兵旅団を指揮してギーズでドイツ軍を撃破し勝利をおさめた。将軍に昇進してからもアルトワの攻撃（1915.5.），シャンパーニュの戦い（1915.9.）で第 2 軍の先頭に立ち，その緻密さと兵士の生命を大切にする事で，全軍の信頼を得た。1916 年 2 月，ヴェルダン防衛戦の指揮を托され，ドイツ軍のクロンプリンツと対戦，補給路の確保を実現し，兵士たちの後顧の憂いを絶ち，精神的安心感を与えた。こうして彼は「ヴェルダンの英雄」として賞賛されるが，防衛戦に主眼を置く彼の姿勢は最高司令部には消極的と映じた。ニヴェル将軍（1866－1924）の後任として西部戦線の総司令官としてドイツ軍に対する総攻撃を指揮した。1918 年に元帥に輔される。戦後は陸相（1934），スペイン大使（1939－40）などを歴任した。第 2 次大戦に際し，ヴィシー政府首班となるが（1942），戦後は対独協力者として裁判にかけられ，死刑の判決を受けるが無期懲役に減刑され，服役中に大西洋のデュー島の監獄で歿した。95 歳だった。

12）Ferdinand Foch（1851－1929）：南仏オート‐ピレネー県の県庁所在地タルブ市の出身。イエズス会の学校で初等教育を受け，エコル・ポリテクニックに入学（1871）。卒業後は陸軍大学に入学し，後に同校の教官になり，戦史と戦略法を講義した。第 1 次大戦に際してはナンシー第 20 師団を指揮，国境での戦いに勝利（1914.8.），ドイツ軍のロレーヌ地方進撃を阻止した。第 9 軍司令官となるや，サン‐ゴン沼沢地の攻勢により，マルヌの会戦の最初の勝利を得た（1914.9.）。次に北部方面軍を指揮，イギリス，ベルギーの両軍と協力，海まで進撃しようとしていたドイツ軍を阻止した。ヴェルダン攻勢のドイツ軍を牽制するためイギリス軍と協力してソンムの会戦を展開した（1916.7.－11.）。しかしこの作戦は結果的に失敗だったが，ヴェルダンに対する応援の価値はあった。アミアンへのドイツ軍の脅威が増大するなか，クレマンソーとイギリスの陸相ミルナー卿の支持により，フォッシュは連合軍最高司令官に任命され，ドイツ軍に対する総反撃を指揮して致命的打撃を与え，勝利の端緒をつくったのである（1918.8.8.）。ドイツ降伏後は，クレマンソーと共に対独強硬策を主張，ドイツの軍事力解体，ラインラントの永久占領を提案し

た。1918 年 8 月に元帥に輔された彼は，アカデミー・フランセーズの会員でもあり（1918），『戦争回想録』*Mêmoires de guerre* を残した。

13）シャルル・ペギーはマルヌの会戦の開戦（1914.9.6.）の前日の 9 月 5 日，フォン・クルック指揮のドイツ第 1 軍団がマルタ川を渡河した時，それへの反撃に参加して戦死した（ヴィルロワにて，9 月 5 日）。

14）第 1 次世界大戦の終結：1918 年の春に敢行されたルーデンドルフ指揮のドイツ軍最後の大攻勢は，フォッシュ統合参謀本部長の下，英軍司令官ヘイグと仏軍司令官ペタンの協力により，パリから 60 粁の所まで肉迫して来たドイツ軍の進撃が阻止され，連合軍は反撃に転じたのである。自軍の限界を悟ったルーデンドルフはドイツ軍が壊滅する前に休戦すべし，と軍首脳に進言する。またこの間にドイツの同盟国が敗北を認め次々に休戦協定に調印していた（ブルガリアは 9 月 29 日，オスマン帝国は 10 月 13 日，オーストリー－ハンガリー帝国が 11 月 3 日にそれぞれ調印）。11 月 6 日，ドイツ政府は連合軍司令官フォッシュ元帥にあてて，休戦交渉に入る旨を伝達，8 日の最初の会談で連合国側が条件を提示，社会主義者エーベルトの率いるドイツ新政府は条件をほゞ承諾し，11 月 11 日，コンピエーニュの森で協定が調印され，未曾有の惨事をもたらした戦争が終結したのである。パリは歓喜の渦となったが，ベルリンは絶望のどん底に落ちた。

15）Louis Jean Malvy（1875－1949）：南仏ロット県フィジャック出身の政治家。急進社会党の代議士として政界に入り（1906－18），商相（1913），内相（1916）を歴任，ブリアン内閣の内相（1916－17）の時，ストライキ鎮圧の不手際と「敗北主義」を右派から攻撃され辞職に追いこまれた。ドイツに対する利敵行為の嫌疑でクレマンソーらに告発され，最高裁判所で 5 年の追放刑の判決を下された。しかし 1924 年の大赦で政界に復帰，ブリアン内閣で内相となった（1926）。ドイツとの交渉での彼の融和的態度が，主戦論者のクレマンソーから敗北主義とみられたのである。

16）Joseph Pierre Marie Auguste Caillaux（1863－1944）：西仏サルト県の県庁所在地ル・マン市出身。父ユジェーヌ・アレクサンドル・カイヨー（1822－96）も第 3 共和政初期の蔵相を務めた。エコル・ポリテクニック教授を経て政界入り（サルト県選出の代議士，1898）。蔵相として財政再建に努力，累進課税の所得税創設で財界や富裕階級の反感を買った。1911 年 7 月 1 日に起ったアガディール港事件ではドイツにコンゴの領有を認める代りに，フランスがモロッコの支配権を所有する事で結着した。ドゥメルグ内閣の蔵相の時，彼の税制改革を猛烈に非難していた「フィガロ」紙編集長ガストン・カルメッ

ト（1858－1914）がカイヨーの妻アンリエットに射殺される事件が生じた（7.20.）。彼女は夫の名誉を傷つけた人非人に天誅を下したと主張，一般大衆はこれに拍手したのである。彼女は同月 23 日に釈放され，これが右派のアクシオン・フランセーズの学生達を憤激させ，カイヨー夫人擁護派と衝突した。この事件でカイヨーは大臣を辞任する。第 1 次大戦中に南米とイタリアに経済使節として派遣されたが，この間に利敵行為があったと右派から攻撃された。対独親善を唱え非戦論者だった彼に対するいわれのない非難中傷だったが，主戦論者クレマンソーはこれを好機と捕え，ドイツとの通謀の嫌疑で告発した。カイヨーは高等法院で有罪判決を受け，投獄された（1920－23）。エリオ内閣の時に釈放され，財政再建のためブリアン内閣で再び蔵相を務めたが（1925－26），強引ともいえる独裁的手法を攻撃され，内閣と共に辞職した。1925 年上院議員となった。

17）Antoine Frédéric Ozanam（1813－1853）：ミラノ生れのカトリックの歴史家，法律家，文学者。カトリックの青年たちのリーダーで，サン‐ヴァンサン‐ド‐ポール協会やノートル‐ダム講演会を創設し信仰の普及に務め，またラコルデールらと「新世紀」*Ere Nouvelle* を創刊した（1948）。リヨン大学，パリ大学でも教鞭をとった。『ダンテの哲学についての試論』*Essai sur la philosophie de Dante*（1839），『5 世紀における文明』*La Civilisation au Ve siêcle*（1856）などの著者がある。

18）Marc Sangnier（1873－1950）：パリ生れのジャーナリスト，政治家。社会主義的カトリックを唱導したため，教皇ピオ 10 世から非難され，その命に従った（1910）。その頃から彼は「青年共和派」le Jeune Répubulic 運動を創設（1912），幾つかの新聞を編集（「デモクラシー」*Le Démocratie*,「人民の覚醒」*L'Eveil des peuples*），平和を擁護し，人種差別主義と戦った。代議士（1919－24）。青年共和派は，1940 年に M.R.P.（フランス人民共和派 Mouvement Républicain Populaire）に併合される。

19）Jacques Maritain（1882－1973）：パリ生れの哲学者。ソルボンヌ大学に学び，パリのカトリック学院教授となる（1914）。妻リサ・オルマンコフと共にカトリック信仰に帰依し（1906），唯物論哲学やベルグソン哲学に反対した。トマス・アクィナス研究の第一人者で，フランスにおけるカトリック革新運動のリーダーとなり，キリスト教的人道主義を主張し，宗教，政治，美学などの諸問題を解決しようとした。『キリスト教哲学について』*De la philosophie chrêtienne*（1933），『人間的政治の諸原則』*Principes d'une politique humaine*（1944）などの著作がある。妻リサはユダヤ系のロシア人で 1904 年に結婚，数種の著書がある。

20）Auguste Perret（1874－1954），Gustave Perret（1876－1952）：コミューヌの乱でベルギーに亡命した石工の息子としてブリュッセルで生れる。パリの美術学校で弟のギュスターヴやクロード（1880－1960）と共に建築を学び，ヴィオレ＝ル＝デュックの影響を受けた。早くから鉄筋コンクリートによる構造の合理化を主張，1903 年にフランクリン街にその理論を実践した新建築物を建設し，フランスにおけるこの新素材による現代建築のパイオニアになった。弟ギュスターヴもしばしば兄と協力し，鉄筋コンクリートによる建物を建設した。ル＝コルビジエは彼の弟子で，ペレ兄弟の様式を発展させた。代表作は前記のフランクリン街のアパート（1903），シャン＝ゼリゼ劇場（1911－13），ランシーのノートル＝ダム教会（1922－23）などがある。

21）rue Franklin：第 16 区にあり，デルセール大通りとポール・ドーメル大通りを結ぶ，長さ 345 米，幅 20 米の通りで，旧パッシー村の村道である。1787 年に道路工事が計画されたが，実施されたのは 1788 年でミニム・ド・シャイヨー修道院の土地が収用されたため，最初はミニム新道と呼ばれていたが，パッシーの住民だったアメリカ人ベンジャミン・フランクリン（1706－1790）の名がつけられた（1791）。8 番地の家に，1896 年から 1929 年 11 月 24 日に死去するまでクレマンソーが住んでいた。この家は修復され，現在はクレマンソー博物館になっている。ペレの建築した建物は 25 番地に現存している。外装に砂岩を使用した高級賃貸マンションである。

22）théâtre des Champs-Elysées：第 8 区のモンテーニュ大通り 13 番地から 15 番地にある。1910 年まではハノーヴァー王ジョルジュ 5 世と王女が住んでいた hôtel de Lillers が建っていた。1911 年から 13 年にかけ，ペレ兄弟が鉄筋コンクリートで劇場を建設した。劇場は喜劇専門の小劇場と小スタジオを持っている。劇場は 2,200 席で，主としてオペラ，コンサート，バレーが演じられた。フレスコ画はブールデル，絵画はルバスク，彫刻はドニの作品で飾られている。喜劇の劇場は 750 席で，ヴィラールとルーセルの絵画が飾られている。小スタジオは 250 席である。

23）René Lalique（1860－1945）：東仏マルヌ県エーの出身。宝飾品，硝子装飾家。その見事な多くの作品で，L'Art nouveau の代表的芸術家となる。金銀，宝石類を使用し，象徴主義的精神で，女性像，植物，動物，昆虫，蛇などを装飾品として創作した。1900 年以降，硝子工房を創設し，壷，食器，燭台などの傑作を大量生産した。

24）André Citroën（1878－1935）：パリ生れの技師，工業家。第 1 次大戦中に軍事産業に従事し（1914－18），ジャヴェル河岸に工場を建設，生産力を増強し，日産 55,000 発

の弾丸を生産した。戦後は，従前から注目していた自動車の将来性に賭けて自動車製造に転進，1919 年に最初の国産車を世に送った。その後，彼はサン・トアン，クリシー，ラヴァロワに新工場を増設，流れ作業を確立して生産技術の向上と能率化を実現した。自動車により輸送にも関心を持ち，自動車専用道路網の建設や国際道路の開発にも努力した。アフリカ横断旅行（1924－25），ベイルートから北京まで 8,000 粁に及びクルージング（1931－32）にシトロエン製の車を使用した。1934 年には有名な前輪駆動車を発明した。

25）Charles Edouard Jeanneret，通称 Le Corbusier（1887－1965）：スイスのヌーシャテル郡のラ‐ショー‐ド‐フォンの出身。同地の美術学校で絵画次に建築を学び，パリに上京してペレから鉄筋コンクリートの使用を学び（1908－09），またウィーンでホフマンに，ベルリンでベーレンスに学んだ（1910－11）。1916 年にパリ定住，フランスに帰化，「新精神」誌 *L'Esprit Nouveau* を発行（1920－25），ピューリスム運動を展開する。従弟のピエール・ジャヌレ（1896－1967）と共に建築設計事務所を開設（1922），理論の実践に踏み出す。以後，個人住宅，博物館，美術館，ホテルなど大小さまざまの建築から都市計画に至るまで広範な建築活動に没頭した。最初から革命的斬新なコンセプションを持つ作品で，彼は 20 世紀最大の建築家と評価される。鉄筋コンクリートという新素材を使用し，立体主義を建築の分野で表現したといわれる。マルセイユの高層マンション（1945－51），ロンシャン礼拝堂（1950）など数多くの作品があり，都市計画はリオ・デ・ジャネイロなどがある。

26）Gabriel Voisin（1880－1973），Charles Voisin（1882－1912）：兄弟共に技師，工業家。兄ガブリエルは中仏ローヌ県ベルヴィン‐シュル‐ソーヌ生れ。弟と共にリヨンの美校で学び，1903 年に飛行協会の設立者 Ernest Archdeacon に雇われた。グライダー練習を積み，1905 年にヴォワザン 1 号機を製作，セーヌ川上でボートに曳かせ飛行を試みた。ブレリオと共同し，アンジャン湖で水上飛行機の実験。複葉機を試作，弟シャルルが操縦，80 米の飛行に成功した（1907.3.15.）。アンリ・ファルマンのため複葉単座機を製作，彼はこの飛行機で 1 粁の円周飛行に成功した（1908.1.13.）。その後弟シャルルは自動車事故で急死する（1912.9.26.）。ヴォワザン複葉機は第 1 次大戦中に 10,400 機が生産された。戦後彼は飛行機の特許権を手放し，自動車製造に没頭するようになった。本文中のヴォワザン・プランは，おそらく彼の飛行機から撮影したパリとその近郊の地図を指すものと思われる

27）rue de Fleurus：第 6 区にあり，ギヌメール街とノートル‐ダム‐デ‐シャン街を

結ぶ，長さ 370 米，幅 10 米から 13 米の通り。この通りは，1780 年頃にリュクサンブール公園を横断する形で建設された。庭園は当時はより広く西方に広がっていた。この道路の開通により公園に沿っていたノートル - ダム - デ - シャン袋小路が消滅する。この街の名はいろいろあげられたが，1794 年 6 月 26 日，ベルギーのフリューリスでジュールダン将軍がコブルグ皇子のオーストリー軍を粉砕して決定的勝利を得，ベルギーをフランスに併合した大勝利の地の名にしようときまった。ここの 5 番地にリュクサンブール劇場，愛称ボビノ劇場があり（1816－17，1819－68），近くの 1 番地にあったカフェは，画家のコロー，ジェローム，作家のミュルジェール，トゥーリエなどが常連だった。

28）Gertrude Stein（1874－1946）：アメリカはペンシルヴェニヤ出身のジャーナリスト。幼時をウィーンで過す。ハーヴァード大学でウイリアム・ジェームスに学ぶ。1903 年以降，生活の大部分をパリで暮し，多くの作家，画家たちをフルーリュス街の自宅に招き，交際した。ヘミングウェイと口論になった時，彼女が彼を嘲笑して呼んだ「失われた世代」lost génération が，その時代の作家たちを総称する定義となった。彼女は，註，美術評論，小説，オペラの台本まで書いたが，『アリス・トクラス自伝』*Autobiographe d'Alice Toklas*（1933），『私の見た戦争』*Les Guerres que j'ai vues*（1945）などが主著といえよう。

29）Josephine Baker（1906－1975）：アメリカ生れの黒人シャンソン歌手，ダンサー。父はスペイン人，母は黒人。パリのシャン - ゼリゼ劇場に出演し一躍スターになる。ジャズ・バンドの指揮者ジョー・ブイヨンと結婚，フランスに帰化した。第 2 次大戦中はアルジェリアの空軍基地にて反ナチ抵抗運動に参加する。戦後は戦争孤児を引取って養育する慈善事業にもあたった。

30）René Chaumette Clair（1898－1981）：パリ生れの映画監督，新聞記者だったが，映画に興味を持ち，「眠るパリ」*Paris qui dort*（1923），「幕合」*Entr'acte*（1924）など実験的短篇を製作，その斬新さで「前衛派」Avant-garde のリーダーとなる。1930 年に完成した「パリの屋根の下」*Sous les tois de Paris*（1930）は，フランスにおけるトーキー映画の第 1 作で音響と画面のモンタージュ手法，パリの下町の人情の見事な描写，同名の主題歌の流行により，クレールを世界的名監督にした。「パリ祭」*Quatorze Juillet*（1933）もパリの下町の庶民生活の哀歓を情緒たっぷりに表現した作品だが，クレールのもう一つの系列には，「自由を我らに」*A nous la liberté*（1931），「最後の億万長者」*Le dernier milliardair*（1934），「悪魔の美しさ」*La beauté du diable*（1949）などの社会

的政治的諷刺をこめた作品群がある。第2次大戦中はイギリスやアメリカで制作にあたったが，見るべきものはない（「奥様は魔女」*Ma femme est une sorcière*，1942）。帰国後も映画製作に従事したが，「リラの門」*Porte des Lilas*（1957）でパリの下町の庶民を描いている。1960年にアカデミー・フランセーズ会員になった。

31）Paul Valéry（1871－1946）：南仏エロー県の地中海に臨むセートの生れ。本名はAmbroise Paul Toussaint Jules Valéry。父はコルシカ人の血をひく税関吏で，母はイタリア系だった。この血と故郷の海地中海が彼の人格形成に深い影響を与えている。13歳頃から詩作を始め，マラルメから象徴主義を学ぶ。モンペリエ大学では法律を専攻するが，卒業後上京しマラルメに師事する。偶然知り合ったピエール・ルイスからその友人ジッドを紹介され，この2人との交友から文学生活に入り，しばらくは詩作に没頭，その作品により象徴派の新進詩人として注目された。

彼はデカルト，ダ・ヴィンチ，ポーなどを研究して，数学や物理学などの科学的方法を感得，普遍的精神の完成を目指し自我の探究に努力した。彼は緻密な思索と堅固な技法によって，調和と詩的情調を持つ詩（『若きパルク』*La Jeune Parque*，1917，『魅惑』*Charmes*，1929）を発表し，一躍して大詩人の名声を得た。彼はまた毎朝心に浮かぶさまざまな事象をメモし，それらの中から鋭利な文明批評的考察を集約して発表し（『現代世界の考察』*Regards sur le monde actuel*，1931，『ヴァリエテ』*Variété*，1924－44），20世紀最高の知性として賛美された。第2次大戦中はレジスタンス運動に共感し，ヴィシー政府の招請にも応じなかった。1945年7月20日，終戦直前に病没した。享年74歳。

32）Cartel des gauches：急進社会党，社会主義的共和派，フランス社会党が連合して形成された。1924年5月11日に挙行された立法選挙で，候補者の割り振りも順調に行き，それが出来なかった右翼勢力に対し，328議席を獲得して勝利した。一方右翼は287議席にとどまった。6月2日に招集された議会で，前年10月に旧多数派の右翼支持を呼びかけ，大統領権限の強化を訴えたミルラン大統領が，大統領職の中立性に違反したとの理由で辞任させられる（6.11.）。後任に右寄りのガストン・ドーメルグが急進社会党右派，中道右派，右翼の支持で選出される。次に急進社会党を中心勢力としたエドワール・エリオ内閣が成立した（6.14.）。しかし財政危機の打開とフランの安定化に失敗し，エリオ内閣は瓦壊（1925.4.2.），次のパンルヴェ内閣とブリアン内閣も従来の困難を解決できず，第2次エリオ内閣も1926年7月21日に退陣，右翼，中道右派，穏健派から急進社会党までを包含する国民連合のポワンカレが内閣を組織し（1926.7.23.），左翼連合は崩壊したの

である。

33）Léon Daudet（1867－1942）：有名な作家アルフォンス・ドーデの子でパリで生れた。医者を志したが（1885－92），文学に転じ，「新評論」紙 *La Nouvelle Revue* や「自由言論」*Le Iibre Parol* などに論評を寄稿，モーラスと共に右翼の機関紙「アクシオン・フランセーズ」を創刊（1907），健筆を揮った。政界入りし（1919－1924）議会における右翼の中心的存在となった。息子フィリップの悲劇的な怪死事件に遭遇し，その死を政府の責任として追及したが，逆に政府側から誣告罪で告発され有罪判決を下され，サンテ刑務所に収容されたが，信じ難い方法で脱走に成功し（1927.6.25.），ベルギーに逃亡し，恩赦で帰国したのは 2 年後の 1929 年の事である。その後もアクシオン・フランセーズに寄稿を続け，小説，評論，随想などを発表したが，注目すべき作品は第 3 共和政のインテリの政治的生活を記録した『幽霊と生者』*Fantômes et Vivans*（1914），『シャルル・モーラスとその時代』*Charles Manrres et son temps*（1928）などである。

34）Paul Painlevé（1863－1933）：パリ生れの数学者，政治家。パリ大学やエコル・ノルマルで教授を歴任，代数曲線，微分方程式などを研究し，古典力学の公理系統，摩擦法則の理論的研究があり，ライト兄弟の航空術研究も後援した。その方面の著書に『航空術』*L'Aviation*（1916），『力学公理』*Les axioms de la mēcanique*（1922）などがある。1910 年に代議士として政界に入り，第 1 次大戦中に文相（1915－16），陸相首相兼（1917.3.－9.），下院議長（1924.6－25.4.），再び首相兼陸相（1925.4.－11.），次に 1925 年から陸相を務め，戦後のフランス軍の軍制を整理統合した。兵役 1 年制を議会に承認させ，マジノ線構築を指揮した。1900 年にアカデミー・フランセーズの会員に選出された。

35）Edouard Herriot（1872－1957）：中仏オーブ県トロワの出身。エコル・ノルマルを卒業，ドレフュス事件の時は急進党々首として擁護派にまわった（1919－57）。リヨン市長（1905）となるや，重要な都市計画を立案実行した。急進社会党の上院議員として（1912－19），ブリアン内閣の公共事業相（1916－17），下院議員として（1919 以降），急進社会党党首として左翼連合内閣を組織（1924－25），イギリス首相マクドナルドと協力し国際紛争の平和的解決をはかるジュネーヴ協定を成立させた。彼は対独強硬路線を転換し，和解路線をとり，イギリス，アメリカと関係を修復し，フランスの安全保障と賠償金支払いを確保した。しかし国内の経済危機を剋服できず，ポワンカレに首相の座を譲らねばならなかったが，ポワンカレは彼を文相に再任したのである（1926－28）。その後も彼は首相兼外相（1932）。国務相（1934－36）。下院議長（1936－42）と要職を歴任，第 2

次大戦中はヴィシー政府から離脱したため，ナチスにより自宅監禁された。戦後は急進社会党名誉総裁に推挙され（1947），後に国民議会議長に選出された（1947－1954）。文学や音楽史についても博識で，『ベートーヴェンの生涯』*La Vie de Beethoven*（1929）などの著書がある。

36）Gaston Doumergue（1863－1937）：南仏ガール県エーグ＝ヴィヴ生れ。弁護士となり，次にインドシナや（1890－92）。アルジェリアで（1893），判事を歴任，急進社会党の代議士として政界入り（1892－1910），1902 年から 17 年まで何度も大臣に就任した。コンブ内閣の植民地相（1902－09），同じく商相（1906），クレマンソー内閣の文相（1906－09），ブリアン内閣の商相（1909－10），次に首相兼外相（1913－14），再び植民地相（1914－17）など歴任，ミルランの後任として，1924 年 6 月 13 日に大統領に選出された。1931 年に政界を引退したが，1934 年 2 月危機に際し，この困難な事態を打開するため再出馬の要請をうけ，国民同盟の内閣を組閣した。しかし大統領権限の強化をはかり，行政改革を断行しようとして，旧同志の急進党の反対にあい，辞職する（1934.11.8.）。

37）Paul Doumer（1857－1932）：南仏カンタル県の県都オーリヤック出身。弁護士，ジャーナリスト。急進社会党の代議士（1888－95），ブルジョワ内閣の蔵相（1895－96），インドシナ総督（1897－1902），退任後再び代議士となり（1902－12），下院議長（1905－06）。反教権主義者のためファリエールに大統領選で敗北する。コルシカ選出の上院議員となり（1912），数度の大臣歴任後に上院議員となった（1927－31）。彼の完璧な愛国主義が評価され，親独派とみなされていたブリアンを破り，第 13 代大統領に選出された（1931.5.13.）。しかしその 1 年後の 1932 年 5 月 6 日，狂ったロシア人ポール・ゴルグロフに狙撃され死亡する（5 月 7 日午前 4 時 37 分，ボージャン病院にて）。犯人ゴルグロフは 34 歳で，有名なファシストだった。大統領は大戦に参戦した作家たちの作品の展示即売会に出席し，クロード・ファレール（1876－1957）の『戦闘』*La Bataille* にサインしてもらおうとした時，狙撃され，2 発が命中して倒れた。15 時 15 分だった。すぐ病院に運ばれたが，翌 7 日午後 3 時 15 分に死去。

38）rue Berryer：第 8 区にあり，フリートラント大通りとフォーブール＝サン＝トレ街を結ぶ，長さ 105 米，幅 13 米の通り。昔の遊園地フォリ＝ボージョンの土地を横切って造成された（1837）。1877 年にエキュリエ＝ダルトワ街から分離されて独立し，有名な弁護士で政治家でもあった Pierre Antoine Berryer（1790－1868）の名をつけた。この街の 11 番地にサロモン・ド・ロートシルトの邸がある。ここで大規模な参戦作家たちの

作品展が開催されていた。

39）Serge Alexandre Stavisky（1886－1934）：キエフ近郊スボドカ生れの詐欺師。1898 年に父と共に来仏，同 10 年にフランスに帰化した。それまで何度も信用状の乱発，詐取，空手形の発行の容疑で警察の追及を受けていたが，数人の代議士の口利きで「バイヨンヌ公益質店」Crédit municipal de Bayonne の設立に成功（1931），約 4,000 万フランの偽造債券を大衆に売りつけ，巨利を手中にした。大蔵省の監査が入り（1934.12.），実態が摘発され，一大スキャンダルとなった（1934.1.3.）。スタヴィスキーのこの詐欺事件に何名かの議員や閣僚が関係しているとして，右翼は議会と内閣を攻撃した。事件発覚後すぐさまスイスに逃亡したスタヴィスキーはシャモニーの山小屋で死体となって発見される（1934.1.9.）。自殺とする政府側に対し，反対派は，彼の口から共犯者が洩れるのを恐れ，口封じのために殺害したと主張し，一般大衆もこれに賛成した。「泥棒くたばれ！」A bas les valeurs！のスローガンの下，アクシオン・フランセーズを中心とする右派は大規模なデモの決行を計画し，政府を脅迫した。その結果，労相ダラディエの辞任が口火となり，ショータン内閣が退陣する（1934.1.27.）。後任の首相に就任したダラディエが右派に同情的なシアップ警視総監を解任した事が，2 月 6 日の大動乱を惹起する。ドゥーメルグの出馬で事態は一時的に鎮静する。しかしスタヴィスキーの活動を熟知していたパリ控訴院判事アルベール・プランスのばらばら死体がディジョン近傍の線路上で発見されるに及び，市民たちは再びスタヴィスキー疑獄事件に関心を持ったのである。議会に特別調査委員会が設置され，その結果，20 名の共犯者が摘発され，そのうち 9 名に有罪が宣告されたが，2 名がガラとボナールという議員だった（1936.1.17.）。スキャンダルとしては月並みなものだったが，スタヴィスキー事件は第 3 共和政の政治体制を揺るがした事は確かである。

40）Albert Oustric（1887－？）：第 3 共和政の時代に起きた経済スキャンダルの一つの主人公。第 1 次大戦後の営利主義の熱気を利用して 1919 年から取引き銀行を設立し，株の投機的売買で大儲けが出来ると宣伝，多くの顧客から多額の出資を入手したが，運用に失敗して破産（1929.11.）したが，彼の怪し気な経済活動に議会関係者の後援があった事実が判明した。特に関係の深かった経済相ラウール・ペレが高等裁判所に出頭を命じられた。そのためタルディユー内閣は退陣に追い込まれたのである。ユストリックは 1930 年 11 月 21 日に逮捕され，裁判の結果，禁錮 1 年の判決を下された(1933.1.19.)。

41）Frank Billings Kellogg（1856－1937）：ニュー・ヨーク州ポッダム生れのアメリ

カの政治家。ミネソタ州選出の共和党上院議員（1917－23），駐イギリス大使（1924－25），クーリッジ大統領により国務長官（1925－29）に任命された。この間メキシコとの関係改善，チリ・ペルー間の国境紛争の解決に努力，ブリアンとの協議の結果，ブリアン－ケロッグ協定を成立させた（1928.8.27.）。紛争解決の手段としての戦争を否定し，平和的交渉で解決に当る事を明記したこの不戦条約の協定に，フランス，イギリス，アメリカ，ドイツ，イタリア，日本，ロシアも加盟した。この功績により，ケロッグはノーベル平和賞を受けた（1929）。ハーグの国際常設司法裁判所の判事も務めた（1930－35）。

42）François, comte de La Rocque（1885－1946）：ブルターニュ半島先端のモルビアン県ロリアンの出身の軍人。フォッシュ将軍の参謀，ウェイガン将軍の随員としてポーランドに派遣され（1921），ペタン将軍とモロッコのリフに出征（1925），輝かしい軍歴の後の 1928 年に大佐で退役，香水王コティ（1874－1934）の援助をうけ，「火の十字架団」の団長に就任，極右勢力のリーダーになった。しかし明確な行動や思想の理念を持たなかった彼は，1934 年 2 月 6 日の右翼の大デモにも積極的に活躍せず，それまでの熱烈な支持者から非難された。右翼連盟の解消（1936）後，「フランス社会党」Parti social français（R.S.F.）を結成，機関紙「プティ・ジュルナル」*Petit Journal* を発行し，大量動員を実現したが，現実的な効果は産まなかった。1940 年にペタン将軍のヴィシー政府に招かれたが，ドイツへの協力を拒否したため，拘束されてドイツに移送された。戦後に帰国し，戦中の抵抗ぶりを訴え，1961 年にやっと認められた。

43）Croix de Feu：1927 年に創設された古参兵たちの団体で，最初は名誉の負傷兵の印である十字架勲章の所持者のみが参加を認められていた。団長には前述のラ・ロック大佐が就任し，次第に他の右翼団体と連合し，団員にも青年たちが加入，人数は増加していった。反議会主義を標榜した国粋主義者の団体となり，1934 年 2 月 6 日のデモに参加したが，慎重に流血の惨事から避難した。この行為が他の極右派から卑劣で臆病な行動として非難された。1936 年 2 月に解散，残党はラ・ロック大佐が新設した P.S.F.に合流する。

44）Edouard Daladier（1884－1970）：南仏ヴォークリューズ県カルパントラスの出身。エリオの教え子で，歴史の教師を務めた後，急進社会党員として代議士となる（1919）。1924 年以降エリオ内閣に初入閣して何度も大臣を経験，1933 年 1 月から 3 月まで首相，翌 34 年 1 月 30 日，スタヴィスキー事件の混乱の最中に再び首相となり，右派に同情的な警視総監シアップを罷免したため，右派の大規模なデモを誘発してしまい（1934.2.6.），辞職する。人民戦線の推進者の一人としてブルム内閣の国防相，次のショー

タン内閣，第 2 次ブルム内閣でも国防相に留任した。1938 年 4 月 11 日，ブルムの後任として首相に就任，英首相チェンバレンと共に，ヒトラーとムッソリーニを相手にミュンヘン協定を締結（1938.9.30.），戦争を回避し平和を維持したと，フランス国民から歓迎された。しかしこの対ナチス宥和策は第 2 次大戦の勃発により破綻し，彼は辞職する。1940 年 3 月 21 日に成立したレノー内閣の国防相になったが，同月 20 日に辞任，ヴィシー政府により 9 月に逮捕され，敗戦の責任を問われ，ドイツに引き渡されたが，終戦後オーストリーの収容所から解放された（1945.4.）。帰国後，彼は共産主義者から対独政策の失敗を烈しく非難されたが，故郷のヴォークリューズ県から議員に選出され（1946－58），国民議会議長，急進社会党名誉総裁に推戴された。

45）Camille Chautemps（1885－1963）：パリ生れの政治家。法律を専攻し，弁護士となり，トゥール市長を務めた後（1912－25），急進社会党代議士（1919）を経て，第 1 次エリオ内閣の内相（1924），パンルベ内閣の法相（1925），ブリアン内閣とエリオ内閣の内相（1923－26）を歴任，フリー－メーソンの高位者でもあった彼は，その調停の才を買われ，1930 年 2 月に首相に就任した。1933 年 11 月の第 2 次内閣の時にスタヴィスキー事件により辞職した。人民戦線のブルム内閣の時に国務相（1936－37），ブルムの後任として首相になった（1937.6.－1938.3.）。ジョルジュ・ボネ経済相の協力で財政再建の兆しが見えてきたにも不拘，人民戦線綱領の完全実施を要求する共産党と社会党に対し絶縁を宣言，急進社会党の単独政権をつくり，人民戦線を瓦壊させた。ダラディエ内閣とレイノー内閣の副総理（1938－40），ペタンのヴィシー政府でも副総理となったが，1940 年 7 月に辞任，アメリカに特使として派遣され，終戦までとどまった。欠席裁判で禁錮 5 年の有罪判決を受けたが（1947），ワシントンで 1963 年 7 月 1 に客死した。享年 78 歳。

46）Frédéric Joliot-Curie（1900－1958）：パリ生れのフランスの物理学者でコレージュ・ド・フランスの教授。パリの物理化学工業校でランジュヴァンに学び，1925 年にラジウム研究所に入所，マリ・キュリーの助手となり，やがて彼女の娘イレーヌと結婚した（1926）。2 人は共同研究を続け，α 線による原子核の人工変換により人工放射能を創出するという偉業を達成（1934），夫妻でノーベル化学賞を受賞した（1935）。ペリウム核が α 粒子に接した時に発生する放射線の性質を精査して中性子の存在を予言，これはチャドウィック（1891－1974，英の原子物理学者）による中性子の発見につながった。1934 年から社会党員だった彼は，第 2 次大戦中は抗独運動に参加，共産主義者と連繋した。戦後は国立中央科学研究所長（1845），次に原子力委員会委員長になったが，共産主義への

関心のため罷免された（1960）。しかしその代りにスターリン平和賞を授与された（1960）。

47）Irene Joliot-Curie（1897－1956）：前者の妻で，キュリー夫妻の長女。夫と共に研究に従事，1935 年に夫と共にノーベル賞を受ける。国立科学研究所長（1935），レオン・ブルム内閣の科学研究省次官（1936），翌年にパリ大学教授，原子力委員会委員を務めた（1946－51）。

48）Paul Langevin（1872－1946）：パリ生れの物理学者。コレージュ・ド・フランスの教授（1909）・パリ大学物理化学研究所長（1925 以降）として物理学理論，特にガスのイオン化，超音波，磁場，相対性理論の分野で重要な貢献をしている。共産主義に共鳴し，大戦中はレジスタンス運動に参加，ナチに一時拘束されたがスイスに脱走し，抵抗を続けた。遺品はパンテオンに祭られた。

49）Jean Baptiste Perrin（1870－1942）：北仏ノール県の県都リール市の出身の物理学者，化学者。パリ大学物理学教授（1910），科学アカデミー会員（1923）。陰極線，X 線の研究で業績をあげ，ブラウン運動の実験から分子の実在を証明し，1926 年にノーベル物理学賞を受けた。第 1 次人民戦線内閣に科学研究所長として入閣（1936－37），大戦中はアメリカに亡命しニュー・ヨークで客死した（1942.4.17.）。

50）Louis Victor, prince de Broglie（1892－1960）：北仏セーヌ－マルヌ県ディエップ市の生れ。名門ブロイ公家の一員。パリ大学教授（1932 以降）として，光と電子の特性について研究，電子波の性質を解明し，波動力学の先駆的研究成果をあげ，その功績により，1929 年ノーベル化学賞を授与された。科学アカデミー会員（1933）。アカデミー・フランセーズ会員（1944）。

51）le procès Landru：被告アンリ・デジレ・ランドリュ（1869－1922）は現代の青髭として有名。禿頭で髭ははやした 40 代の極めて洒落た服装した男で，1919 年 4 月に詐欺罪で逮捕され，その後の調査で，10 人の女性を結婚を口実にガンベにある自分の別荘に招待し，女性たちに家具や証券類の財産を処分させ自分のものにした後に絞殺し，死体を料理用ストーヴで焼却した事が判明した。ランドリュは首尾一貫して否認し続けたが，死刑の判決を受け，ヴェルサイユでギロチンにより処刑された（1922.2.22.）。

52）*La Garconne*：元龍騎兵士官で退役後に作家に転向したヴィクトール・マルグリット（1866－1942）の作品で，発売と同時に当時としては驚異的な 75,000 部を売ったベスト・セラー小説。戦後の混乱の社会で，許婚に裏切られた富豪の娘モニック・レルビエがデザイナーとして独立，仕事と恋愛に自由を謳歌する奔放な生活を描く。髪をショート・

カットにし，流行の服を着こなし，自動車を運転する颯爽とした彼女は，戦後の女性解放運動のシンボルとなった。しかし主人公の倫理道徳観の欠除を非難され，作者はレジオン・ドヌールをもらい損ねた。

53）Maurice Rostand（1891－1968）：父は『シラノ』の作者エドモン・ロスタン（1868－1918）。父と同じ文学の道に進み，小説，詩，脚本を量産したが，遂に父に及ばなかった。みるべきものは歴史に題材をとった『鉄仮面』*Le Masque de fer*（1923），『ナポレオン 4 世』*Napoléon IV*（1929）など。

54）Mistinguett，本名 Jeanne Bourgeois（1875－1956）：パリ近郊ヴァル＝ドワーズ郡モンモランシーのラ・ポワント・ラゲット出身のシャンソン歌手，ダンサー，女優。パリのしがない寄席トリアノン・コンセールでデビュー（1895），歌って踊って芝居ができ，悪声ながら妙に魅力ある雰囲気を醸成し，ミュージック・ホールのスターになった。ムーラン・ルージュ，フォリ＝ベルジェール，カジノ・ド・パリなど一流の舞台に立ち，特にその脚線美で絶大の人気を誇った。

55）Maurice Chevalier（1888－1972）：パリ生れのシャンソン歌手，俳優。13 歳でミュージック・ホールにデビュー，アメリカのジャズ歌手に憧れていた。ミスタンゲットのパートナーとなり（1909），その独得の歌声と陽気な風貌で一躍人気スターになった。トーキーの登場と共にアメリカの映画会社パラマウントに招かれ，多くの作品に出演した（*Parade d'amour*, 1929, *La Veuve joyeuse*, 1931, *Folie Bergère*, 1935, など）。帰国後も歌に映画にと活躍した。彼はパリの下町メニルモンタンの出身で，庶民の発音で歌い親しまれた。1968 年秋に惜しまれつつ引退した。

56）Jacques Copeau（1879－1949）：パリ生れの演出家，俳優。ジャーナリストとして出発，ジッド，シュランベルジェらと共に N.R.F.誌を創刊（1908），文芸評論で名を知られた。昔から抱いていた演劇革新の夢をジッドらの協力で実現しようとし，第 6 区のヴィユー＝コロンビエ街の 21 番地にあった小ホールを改造して町名と同じヴィユー＝コロンビエ座を旗上げした。彼はアントワーヌ以来の悪しき伝統となっている極端な自然主義的写実観を排し，人間本来の感受性と想像力に訴える新しい演劇の創出に努力した。そのためジッド，ジュール・ロマン，ヴィルドラックらに新しい脚本を要請，自分の育成した新進俳優のルイ・ジューヴェ，シャルル・デュラン，シュザンヌ・ビングを出演させ，演劇界に新風を吹き込んだ運動として，多くの支持者を集めた。第 1 次大戦中は渡米し 2 シーズンを過し，常置舞台方式を採用して，舞台装飾や装置にも改革をもたらした。1924

年にヴィユー＝コロンビエ座を閉じたのは，いくら大入りでも僅か 400 席の小劇場では経営が不可能だったからである。その後は巡回劇用「レ・コポー」を編成し，広く大衆に新しい演劇を紹介した。コンセルヴァトワール演劇科教授，コメディー・フランセーズの演出家として活動したが，第 2 次大戦後は巡業していたブルゴーニュ地方のボームに引退し寂しく死去した（1949.10.20.）。

57）Charles Vildrac，本名 Charles Messager（1882－1971）：パリ生れの詩人，劇作家。義弟となったジョルジュ・デュアメルら数人の友人と詩社「アベイ」Abbaye を設立，『愛の書』*Le Livre d'amour*（1910）や『絶望者の歌』*Les Chants du désespéré*（1921）などを発表し，詩人として出発した。第 1 次大戦に従軍した後（1914－18），劇作『商船テナシティー』*Le Paquelot Tenacity*（1920）で演劇界にデビュー，この作品はコポーの名演出によって大成功をおさめた。続いて彼は『ミシェル・オークレール』*Michel Auclair*（1923），『巡礼』*La Pélerin*（1923），『ベリヤール夫人』*Madame Béliard*（1925），『いさかい』*La Brouills*（1930）など発表し，演劇革新の作家として不動の地位を確保した。また『ライオンのめがね』*Lunette du lion*（1951）などのすぐれた童話も執筆している。第 2 次大戦中はレジスタンス運動に参加した。

58）Charles Dullin（1885－1949）：スイスと国境を接するサヴォワ県イエンヌ出身の俳優，演出家，劇場支配人。公証人の末子に生れ，リヨンの高校を中退してから各地を転々とし，パリの国立演劇学校で聴講生，次にラパン・アジルなどで朗読やオデオン座の端役で暮らしている所をコポーの目にとまり，ヴィユー＝コロビエ座の創立に参加し修業を積んだ。1922 年独立しアトリエ座を開設，同時に俳優学校も創立し若手の育成にも努力した。アリストファネス，ピランデルロ，ベン・ジョンスン，シェイクスピア，コルネイユ，モリエールなど広く古典演劇の傑作を自然な演技と様式的な舞台装置で演出し，新劇運動の中心となった。1940 年から 47 年までパリ市立サラ＝ベルナール劇場の演出を担当，ガストン・バティ，ジューヴェ，ジョルジュ・ピトエフと「4 人組」Cartel des quatre を結成（1926）した。彼は映画にも多く出演している。詩を愛し，霊感溢れる演技を見せ，類稀な教師でもあったデュランは，多くの俳優や演出家に影響を与えている。ジャン＝ルイ・バローやジャン・ヴィラールは彼の弟子である。

59）théâtre l'Atelier：第 18 区にあるシャルル・デュラン広場にあった。この広場は昔はオルセル村の広場といわれていたが，1822 年にセヴェストなる興行師がモンマルトル劇場を建ててから，劇場広場と呼ばれた。彼は附属施設として俳優養成校をつくり，若

手座 théâtre Jeunes-Eleves と呼んだ。モンマルトル劇場は経営者が交替する度に，L'Opéra-Bouffe（1847），Le Peuple（1848）と変り，1907 年に改造してデュランがアテネ座を開場したのである。広場は 1957 年にデュラン広場と命名された。

60）théâtre de l'Athénée-Comique：第 9 区にある squart de l'Opéra-Louis-Jouvet の 4 番地にある。1955 年からジューヴェが支配人になって以来，この劇場は l'Athénée-Louis-Jouvet と改名された。彼は，1951 年 8 月 16 日，64 歳で死ぬまでこの劇場を監督した。

61）Jean Renoir（1894－1979）：パリ生れの映画監督。画家ルノワールの次男。最初は画家をめざしたが映画製作に転向，ゾラの作品『ナナ』の映画化でデビューした（1926）。彼はデビュー当初から映画製作の中に芸術家としての欲求を注入し，現実感覚，忍耐力，自由を愛する気持を保持し続けた。詩的自然主義とでも言うべき彼の作風には印象主義の画家たちや自然主義の作家であるゾラやモーパッサンの影響がみられる。彼はネオ‐リアリスムの道を開拓，人民戦線を賛美する作品を製作した（『ラ・マルセイエーズ』*La Marseillaise*，1936）。彼の進歩的な思想を盛った『大いなる幻影』*La Grande Illusion*（1939），人間の本性を赤裸に活写した『獣人』*La Bête humaine*（1938）などの傑作を創作した。しかし強烈すぎた大胆な手法と斬新さは当時の観客にも批評家にも充分に理解されなかったのである。戦争中はアメリカに亡命（1941－50），『南部の人』*The Southerner* などを制作した（1945）。帰途インドでカラー映画『河』*Le Fleuve*（1951）を撮影，さすがルノワールの子と感心させる配色の冴えをみせている。帰国後はメリメの原作を脚色した『黄金の馬車』*Le Carosse d'or*（1952），『フレンチ・カンカン』*French Cancan*（1955）など娯楽色濃厚な作品を送り絶賛を博した。彼の人生や人間に対する愛情，作品の持つリリスム，寛仁さなどで，多くの映画人に影響を与えた。

62）Georges Carpentier（1894－1975）：北仏パ‐ド‐カレー県リエヴァン出身のボクサー。1920 年にライト・ヘビュー級の世界チャンピオンになったが，1921 年 7 月 2 日，ニュー・ヨークのジャージー・シティで挙行された試合で，アメリカ人のボクサー，ジャック・デンプシーに敗北する。

63）Jack Dempsey，本名 William Harrison（1895－1983）：コロラド州マナサ出身のボクサー。1919 年から 26 年までヘビュー級世界チャンピオン。敏捷さとパンチの強さ，低い前傾姿勢で，しばしば相手をノック・アウトで倒した。1921 年 7 月 2 日，ジョルジュ・カルパンティエがジャージー・シティで挑戦したが，4 回途中でノック・アウトされた。

1926 年，Tunny に破れ，タイトルを失った。

64）Charles Lindeberg（1902－1974）：デトロイト生れのアメリカ人飛行家。曲芸飛行をしていたが，陸軍航空学校に入学（1924.3.15.）し技術を練磨した。卒業後はシカゴ ニュー・ヨーク間の郵便飛行機に乗っていたが，ニュー・ヨーク - パリ間の無着陸飛行に賞金 25.000 ドルがでるのを知り，これに挑戦した。友人の協力で単発の単座機 Sprit of Saint Louis を制作，1927 年 5 月 20 日，ニュー・ヨークのロング・アイランドのルーズベルト空港を出発，33 時間 30 分後に，パリのル・ブールジェに着陸，30 万の市民の大歓迎を受けた（ 5 月 21 日 22 時 5 分）。1929 年 5 月 20 日，陸軍大佐になっていた彼はモロー上院議員の娘アンと結婚，二人して世界各地の長距離飛行を行った。愛児が誘拐され虐殺される悲劇にも見舞われた（1932.3.1.）。太平洋戦争は旅団長として戦闘機部隊を指揮した。ハワイのマウイ島で死去（1974.8.26.）。享年 72 歳。

65）Jean Mermoz（1901－1936）：北仏エーヌ県オーヴァントン出身の飛行家。南仏ブュッシュ - デュ - ローヌ県エクス - アン - プロヴァンス郡イストルの空軍基地で飛行士の免許を得る（1919）。シリア戦役に従軍，1923 年に除隊後の翌年ラテコレール社に入社，飛行業務に従事，カサブランカ - ダカール，ナタル - ブエノス - アイレス間を飛行，アンデス山脈を商業機で初めて横断した。1930 年 5 月 12 日，南大西洋無着陸横断飛行に成功，フランスと南米間の郵便航路を開拓した。1931 年 3 月 30 日から 4 月 1 日間に 8,960 粁を 59 時間で飛行するスピードの世界記録を樹立した。1933 年 1 月 12 日から 22 日にかけ，パリ - ブエノス - アイレス間の連絡に成功する。しかし 1936 年 12 月 7 日，南大西洋上のダカール沖で消息を絶った。愛機は水上飛行機「南十字星」号，乗員は彼の他に Pichodon，Lavidelie，Ezan，Cruveilher だった。

66）André Breton（1896－1966）：ノルマンディー地方オルヌ県タンシュブレ出身でシュルレアリスムを創出した詩人。最初は精神医学を学んだが，アポリネールと交際し影響を受けた。トリスタン・ツァラによりチューリッヒに生れたダダイスムをフランスに紹介，アラゴン，スーポーらとダダの機関誌『文学』*Littérature* を創刊した（1919）。心霊的自動記述の実験にも熱中，フロイドの説により霊感を解明しようとした。1924 年「シュルリアリスム宣言」を発表する（1924）。それ以前の 1920 年スーポーとの共著『磁場』*Les Champs magnétiques* を発表，翌年フロイドを訪問したことが，宣言の基盤になった。1928 年発表の『ナジャ』*Nadja* は，夢と行動のシュルレアリスムの見事な実験成果となる。一時共産主義に共鳴して接近するが，あらゆる外的政治的干渉からの独立を

宣言。シュルレアリスムの自由を表明した。大戦中はアメリカに亡命，雑誌「ＶＶＶ」を発行，多くの展覧会，講演会を開いて，啓蒙に務めた。1946 年に帰国，共産主義との闘争を再開した。

67）Philippe Soupault（1897－1990）：パリ郊外ナンテール郡シャヴィルの出身の詩人，ジャーナリスト。1917 年に詩集『水族館』*Aquarium* で出発，やがてブルトン，アラゴンらと協力し『文学』を創刊，ダダイズムからシュルレアリスムに変動する文学運動に参加し，ブルトンとの共著『磁場』で，その中心人物の一人になる。また小説『好人物』*Le Bon Apôtre* を発表（1923），第 1 次大戦後の社会的混乱を前にして苦悩する「新世紀病」の青年を描いて好評を得た。しかし文学そのものを否定を出発点とするシュルリアリスムの中にあって，文学的すぎたスーポーは同志により除名され（1927），この運動から遠去かる。この間ロシアその他の地を旅行し見聞を広め，ラジオ放送や演劇にも関心を持ち続けた。第 2 次大戦中は一時ヴィシー政府に逮捕されたが，その後アメリカに亡命，帰国後に『殺戮者の時』*Le Temps des Assassins* を発表（1945）したが，これは牢獄生活を描いている。

68）dadaïsme：第 1 次大戦中の 1915 年頃から 1922 年頃にかけ，従来の既成秩序，既成美学の全面的否定を目標に，チューリッヒとニュー・ヨークにほとんど同時に生じた文学・美術運動。ダダとは「無意味」を意味する語でツアラの創出という。ドイツとフランスで特に盛んで，多くの雑誌が創刊された。政治的圧迫により，ツアラたちがパリに移住してから（1919），パリがその中心地になった。ツアラの他にアルプ，マックス・エルンスト，ブルトン，アラゴン，カンディンスキー，ドローネー，キリコらが活躍した。その後ダダイズムは戦後の混乱を剋服し新社会の建設をめざす革命的政治運動と，芸術至上主義的近代の創造をめざすシュルリアリスム運動に分裂していく。

69）surréalisme：あらゆる創造の秘密は夢にあり，夢こそ人間性の完璧な表現を可能にするから，夢の中で霊感に従って書いてこそ真の文学創作が可能になる，とブルトンは宣言し，自動記述法 Automatisme をシュルレアリスムの手法とすべきと主張した（「シュルレアリスム宣言」）（1924.30.）。夢，本能，欲求，革命の全能を掲げたこの運動は，あらゆる既成の秩序，道徳，論理を否定，社会が個人に強制する一切の束縛を断ち切り，超現実的真理を探究することにより，人間精神の自由と独立を獲得しようとした。ダダイズムの破壊的ニヒリズム的側面から脱却し，それを剋服しようとして，ブルトン，アラゴン，エリュアール，スーポーらが中心となって創刊した「シュルレアリスム革命」誌 *La*

Révolution surréaliste（1924－29）によってこの運動は開始された。しかし運動は既成概念の打破という文学的美的革命にとどまらず，既成社会の改革という政治面への関心が強くなり，共産主義革命に賛同した同志が離脱していった。第 2 次大戦勃発と共にこの運動は一時的に停止してしまった。戦後はブルトンらの努力により再開されるが，共産党と実存主義への袂別宣言が注目されるものだった。流派としての理論の実効はもはやなかったが，その影響は多くの作家や画家，映画監督に及んでいる。

70）Louis Aragon（1897－1982）：パリ生れの詩人，小説家，批評家。1916 年に医師見習となったが文学に関心を寄せ，ブルトン，スーポーらと『文学』を刊行，ダダ運動に参加した。やがてシュルリアリスム運動に発展した文学の潮流に乗り，詩集『永久運動』*Le Mouvement perpetuel*（1925），小説『パリの農夫』*Le Paysan de Paris*（1926）など，旺盛な創作活動を行った。社会改革を志向，モロッコのリフ族の独立を弾圧する政府の帝国主義的軍事行動に反発し，共産党に入党（1927）。これがブルトンらの友人との袂別につながった。共産党の機関誌「ユマニテ」次に夕刊紙「ス・ソワール」*Ce soir* の責任編集者になる。第 2 次大戦中はニースを中心にレジスタンス運動の指導者としてナチと戦い，解放後は「ス・ソワール」紙の復刊に努力，再び活溌な作家活動に入った。代表作は詩集『新断腸詩集』*Le Nouveau Crève-coeur*（1949），小説では『レ・コミュニスト』*Les Communistes* 6 巻（1949－51）などがある。

71）Louis Ferdinand Céline，本名 Destouches（1894－1961）：パリ近郊ナンテール郡のクールブボワ出身の小説家。「12 の職業，13 の悲惨」の後，第 1 次大戦に志願兵として参戦，「普遍的牛小屋」を体験し，しかも重傷を負って復員する。苦労の末に医師免許をとり，船医としてアフリカ，アメリカ，キューバなどを訪れた。その間にこれまでの幾多の生活体験を卑語俗語を使用した強烈な文体で描写し，その文中に盛り込まれた痛烈にして悲痛，しかも奇想的諷刺的詩情の作品『夜の果の旅』*Le Voyage au bout de la nuit*（1932）で一躍文壇のスターに成り上がった。その後の作品も既成社会に対する悪罵と諷刺と非難の連続で（『なしくずしの死』*Mort à crédit*（1936）など），文学界の異端児とみられた。アナーキストの面もある一種の人道主義者ともいうべきセリーヌは，反ユダヤ主義者で『虐殺にふさわしいガラクタ共』*Bagatelles pour un massacre*（1938）などの猛烈な反ユダヤ主義パンフレットも発表している。このような思想傾向から，第 2 次大戦中はヴィシー政府に協力したため，戦後は対独協力者として有罪判決を受け投獄された。伝統的文法を無視，話し言語や俗語を駆使し，魂の根底から爆発する強烈なリズム

と迫力あるリリシズムを持つセリーヌの文体は，心理的トラウマを快癒する力を蔵しているのである。

72）Sidomie Gabrielle Claudine Colette（1873－1954）：ブルゴーニュ地方ヨンヌ県サン＝ソヴェール＝アン＝ピュイゼ出身の女流作家。貧しいブルゴーニュの片田舎で育った彼女は，20 歳で二流文士ウィリー Willy（本名 Henry Gauthier-Villard，1859－1931）と結婚（1893），パリに上京，夫の勧めで故郷での少女時代の回想を私小説風に仕上げた『学校へ行くクローディーヌ』*Claudine â l'Ecole*（1900）を夫名義で発表した。この本が好評だったので次々とクロディーヌ物を出版した（1900－93，全 4 冊。後の 3 冊は夫との連名コレット・ウィリーで発表）。夫の横暴に耐えかねて離婚（1906），生活のためミュージック・ホールに出演したが，この体験は彼女の見聞を広げるのに役立った。第 1 次大戦中は「マタン」*Le Matin* 紙の特派員として従軍した。彼女は 1920 年に『シェリ』*Chéri*，『青い麦』*Le blé en herbe*（1923），『ジジ』*Gigi*（1945）など戦後矢継ぎ早に傑作を発表し，プルーストに比肩する大作家に成長した。女性心理を緻密に分析描写し，また動物や植物などの自然も新鮮な感覚で表現，格調高い簡潔な文体で創作に没頭した。1945 年にはアカデミー・ゴンクール会員に選出されている。

73）André Gide（1869－1951）：パリ生れの小説家。プロテスタントの司法官の父の下，厳格な宗教的雰囲気の中で幼少時代を過したため，キリスト教と聖書の影響を深く受けた。従姉マドレーヌへの愛情を中心に，青年特有の霊肉の相剋の苦悩や不安を描いた処女作『アンドレ・ワルテルの手記』*Cahier d'André Walter*（1891）を発表した頃，友人のピエール・ルイスと共にマラルメを訪問，象徴主義の洗礼を受けた。その後も『背徳者』*L'Immoraliste*（1902），『狭き門』*La porte étroite*（1909）で，肉体と霊魂の闘争を描いている。1925 年からのアフリカ旅行で，フランス植民地の実情に触れ，帝国主義的不正と搾取に怒りを覚え，共産主義に傾斜する（『コンゴ紀行』*Voyage au Congo*，1928，『チャド湖より帰る』*Retour du Tchad*，1928）。しかしソビエトを旅行し，その実態を目にし，共産主義から離れてしまう（『ソビエト紀行』*Retour de l'U.R.S.S.*，1936，『ソビエト紀行修正』*Retouches â mon retour de l'U.R.S.S.*，1937）。第 2 次大戦は最初ペタンに好感を持ったが，後にアフリカに逃れ，消極的ながらレジスタンス運動に参加した。彼はすぐれた批評家でもあり，『ドストエフスキー』（1923）は傑作とされている。また N.R.F.誌に多くの評論を発表，また幾多の俊秀を発見育成している。代表作には『田園交響楽』*La Symphonie pastorale*（1919），『法王庁の抜け穴』*Les Caves du*

Vatican（1914），『にせ金つくり』*Les Faux-monnayeurs*（1926），『一粒の麦もし死なずば』*Si le grain ne meurt*（1926）などがある。

74）Charles Trenet（1913－2001）：南仏オード県ナルボンヌ出のシャンソン歌手，作曲家，作家。詩の中にユーモア，空想，感動を盛り込んだシャンソンを多く作詞作曲した。代表作は『海』*La Mer*。斬新なインスピレーションから生れたメロディーは，500 曲以上になるシャンソンを通じて，彼を当時のシャンソン歌手の第一人者にした。コクトーやジャコブらのシュルレアリストの影響を受けながらも，生きる喜びや過ぎゆく時の哀愁を歌って，一般市民のハートをつかんだ。

75）Damia，本名 Marise Damien（1889－1978）：パリ生れのシャンソン歌手。パリの寄席でデビュー（1917）。彼女はシャンソンを劇と考え，歌いつつその内容を演じたという。一般庶民の心を歌い，その喜びや悲しみを歌った。現実派歌手 Chanteuse réaliste と呼ばれた。代表作は『暗い日曜日』*Sombre dimanche*。

76）Edith Piaf，本名 Giovanna Gassion（1915－1963）：パリ生れのシャンソン歌手。貧乏のため少女時代から街頭で歌い，生活費を稼いでいた。キャバレーの支配人ルイ・ルプレが偶然彼女の歌を耳にし，自分の店に出演させた時から，彼女の運が開けた。ラジオ，レコード，ミュージック・ホールから流れる彼女の歌声は，その独得な魅力でパリ市民のみならず，フランス人，さらに世界中の人の心を捕えたのである。晩年の闘病生活は一つの伝説となっている。イヴ・モンタンを発掘したのも彼女である。『バラ色の人生』*La Vie en rose*,『愛の賛歌』*Hymme â l'amour* は彼女の絶唱である。

77）Le Front populaire：共産党，社会党，急進社会党などが連合し，1936 年に政権を握り成立した左派内閣を指す。1934 年 2 月 6 日の大騒乱が直接の契機だったが，それ以前からみられたイタリアのファシスム，ドイツのナチズム，フランスのアクシオン・フランセーズなど右派勢力の抬頭に，フランス国内の左派が警戒感を強めていたためである。種々の対立があったが，左派諸政党と組合が障害を剋服し，団結して右派の攻勢に対抗する協約が成立したのが，1935 年 7 月 15 日で，人民連合全国委員会（人民戦線の公式名称）である。翌 36 年 1 月 12 日，「パン・平和・自由」を共通のスローガンとして，各政党が選挙戦を展開，右派の 222 議席に対し 367 議席を獲得し（社会党 147，急進社会党 115，共産党 72 ほか），社会党党首レオン・ブルムを首班とする人民戦線内閣が実現した（1936.6.4.）。世論の反発を避け，同時に責任も負わないようにするため共産党からは入閣せず，社会党から 17 名，急進社会党から 13 名，その他 3 名が閣僚になった。6 月末ま

でに首相官邸のマティニョン宮に，組合代表と経営者側代表を招集して会談，団体協約，週 40 時労働，2 週間の有給休暇，昇給制，組合の結成などの他に，フランス銀行の刷新，鉄道の国有化等，労働者側に有利な諸条件を経営者側に承認させたのである。しかし増大する政府の財政難，経済不安と共産党の無理な要求，更に不満をつのらせたブルジョワ階級の圧力に抗しきれず，ブルムは辞職（1937.6.21.），ショータンに首相の座を譲った。しかしこの内閣もブルムの直面した困難な諸問題を解決できず退陣（1938.3.10.），第 2 次ブルム内閣（1938.3.13.－4.8.）も，急進社会党のダラディエ内閣も左派勢力のみでは事態を打開できず，右派勢力の協力を得てミュンヘン協定の承認を議会からとりつけ，これに反対した人民連合委員会から急進社会党が脱退し，ここに人民戦線は崩壊したのである。

78）Romain Rollan（1866－1944）：ブルゴーニュ地方の中仏ニエーヴル県クラムシーの出身の小説家，劇作家，評論家。父は公証人，母は熱心なカトリック信者で，幼少の彼は母からキリスト教信仰を教えられた。パリに移住した家庭から名門校リセ・ルイール・グランを経てエコル・ノルマルを卒業し，イタリア留学生に選抜され，ローマのフランス学院に留学した（1889－91）。この間ヴァチカン宮の図書館で歴史研究をすすめ，また各地を旅行し南国イタリアの風物に接した。ローマに隠棲していたドイツのインテリ女性マルヴィダ・フォン・マイゼンブークと交際し，ドイツ理想の精神，ニーチエ，ワグナー，ゲーテらを彼女の紹介により知る事ができた。帰国後はエコル・ノルマルやパリ大学の教授を歴任するかたわら，『聖王ルイ』*Saint Louis*（1897）をはじめとする劇作を発表した。ドレフュス事件に際しては擁護派に参加，軍国主義，国家主義の右派と対立した。そして『ダントン』*Danton*（1898）など一連の革命劇を執筆した。またベートーヴェン，ミケランジェロ，トルストイらの秀れた伝記も書いている。ペギーの創刊した『半月手帳』の編集に協力し，長篇『ジャン・クリストフ』*Jean Christophe*（全 10 巻，1904－12）を発表，音楽家の魂の発展を詳述して一大教養小説を完成させた。この作品によりロランの文学者としての名声は不動のものとなり，アカデミー・フランセーズ文学大賞（1913），ノーベル文学賞（1916）が授与された。第 1 次大戦に際しては不戦と絶対平和主義を主張し，この信念がやがてガンディーやラーマクリュシナの非暴力革命思想に関心を抱かせた。しかしナチス・ドイツを中核とする国際的ファシスムの勃興に対し，次第に政治的実践活動にバルビュスらと参加，活溌な文筆活動により，反独裁の筆陣を張った。1944 年 8 月 25 日，パリ解放の知らせを病床で喜びながら，同年 12 月 30 日に歿した。享年 88 歳。前記の他に長篇『魅せられたる魂』*L'Ame enchanté*（全 6 巻，1922－33）がある。

79）Henri Barbuse（1873－1935）：セーヌ県アニエール出身の作家。父は無名の劇作家でジャーナリスト，母はイギリスの農家の娘だった。パリ大学在学中に新聞の懸賞に応募して入賞，審査員のカチュール・マンデスに認められ，後に彼の娘と結婚する。内務省，農務省勤務の後，アシェット書店に入社（1912），編集に従事し論説なども発表した。彼を一躍有名にしたのは，1908 年に出版した『地獄』*L'Enfer* である。しがない宿屋の古びた一室の壁に穴をあけ，主人公がその隣の部屋で繰り広げられるパリの庶民の愛欲，苦悩，不安などの種々相をリアルな筆致で描写したこの物語は，バルビュスをゾラの後継者と賛美する人たちと，他方その描写の残虐といえる表現を烈しく攻撃する人たちに別れさせた。第 1 次大戦には志願して前線に勤務，3 度負傷し，傷が癒えるとその都度前線に戻った。その間に体験し目撃した戦争の修羅場，特に悲惨な堅濠などの実相を克明に記録した『砲火』*Le Feu*（1916）はゴンクール賞を受賞した。次作の『クラルテ』*Clarté*（1919）も同傾向の作品で，この出版を機に反戦平和運動に専心，共産党に入党，国際作家同盟のフランス支部の機関誌『コミューヌ』*Commune* の主幹を務めた（1933－35）。ロマン・ロランとも協同しファシズムと戦争反対運動をリード，人民戦線の成立に努力（1934），1935 年 7 月 14 日パリの人民戦線の大規模なデモ行進に参加した。ソビエトを訪問中モスクワで客死した(1935.8.30.)。享年 62 歳。

80）Albert Sarraut（1872－1962）：ボルドー生れの急進社会党議員。兄モーリス(1869－1943)も同志だったが，戦争中に対独協力派のフランス部隊 Milice に暗殺されている。アルベールはやがてインドシナ総督（1911－14，1916－19），陸軍次官（1914－15），植民相（1920－24，1932－33），内相（1926－28，1934），海相（1930－31，1933－34）と各省大臣を歴任後，首相に選任された（1933，1936）。しかし続発するストライキに有効な手段を持てず，またヒトラーのラインラント占領を結果的に黙認した責任を追究され辞任した（1936.6.4.）。第 2 次大戦中は非協力派としてドイツに移送監禁されたが（1944），終戦後に釈放され帰国（1945），フランス連合議会議員として政界に復帰。

81）Hôtel de Matignon：第 7 区のヴァレンス街（長さ 930 米，最狭幅 10.3 米）57 番地にあるパリで最も豪華な大邸宅。ルイ 15 世時代の名将でフランス元帥になったリュクサンブール公爵後のタングリ公クリスチアン - ルイ・ドモンモランシーのために，1721 年から建築が開始された。彼は 1723 年になっても未完成のこの邸を，自分の姪の夫のトリニー伯爵でノルマンディー総督だったゴワヨン・ド・マティニョンに売却した。このためこの邸宅はマティニョン館と呼ばれるようになる。その後多くの転売や相続を経た後，

1935 年から内閣総務庁官邸となった。

82）Arthur Neville Chamberlain（1869－1940）：父 Joseph（1836－1914），兄 Austin（1863－1937）共に優秀な政治家だった。バーミンガムで金物製造業者として成功，市参事会員となって政界に入り，保健相として地代制限法，住宅法などを成立させて（1923），その後も多くの社会政策関係の法律を制立した。ボールドウインに代って首相となり，ミュンヘン協定でヒトラーと妥協し，一時的だが戦争を回避して，この時ばかりは国民から歓迎された。しかしヒトラーのポーランド侵入でこの妥協が非難され，更にドイツのノルウェー侵入にあって議会から攻撃され，主戦派のチャーチルに首相の座を譲った（1940.5.10.）。

83）Accords de Munich（1938.9.29.-30.）：ズデーデン地方の少数派のドイツ人問題解決のため，イタリアのムッソリーニの呼びかけで，フランスのダラディエ，イギリスのチェンバレン，ドイツのヒトラーがミュンヘンに会合して成立した協定。英仏はヒトラーに譲歩し，ドイツ国防軍がズデーデンに進駐してドイツ領に併合する事を承諾，ポーランドとハンガリーもこの機会を利用しチェコ領の一部を併合，地図上からチェコスロヴァキアが消滅した。この会議に当事国のチェコの代表が呼ばれていない事が最も不可思議な事だった。また英仏の譲歩は西欧民主主義がヒトラーの膨張主義の前に退却した事になり，その後のヒトラーの侵略を防止できなかったという最大の外交的失策の協定となったのである。

（続　く）

（追　　記）

（1）参考図書などは，〔I〕の巻末に掲載してありますので，そちらを御参照ください。

（2）前稿〔XXXI〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p.10.	上から 8 行目	エコル・ノルマル
p.20.	下から 12 行目	ヴィテスブルク
p.21.	上から 11 行目	ヴィテスブルク
p.24.	上から 6 行目	(1912－13),

—— 2009.7.6——